

## 研究ノート

## 『日本大辞書』における音義説の位置

河瀬 真弥

- 1 はじめに
- 2 平田篤胤『古史本辞経』流の音義説からの影響
- 3 音義説と美妙の関心との親和性
- 4 美妙音義説と国学流音義説の思想的基盤の差異
- 5 おわりに

## 1 はじめに

本稿は山田美妙による国語辞書『日本大辞書』（1892–1893 年刊）における、音義説と呼ばれる語源理論の位置づけを考察するものである。

『日本大辞書』は、明治時代の代表的国語辞書『言海』（大槻文彦著、1889–1891 年刊）を披見した小説家の山田美妙によって、『言海』に対抗すべく編纂された国語辞書である。『日本大辞書』については従来評価が低かったものの<sup>1</sup>、近年は国語史の資料として活用しようという動きが顕著である<sup>2</sup>。しかし、『日本大辞書』に見える美妙の学問につい

<sup>1</sup> 山田忠雄（1981: 618）、『日本語学研究事典』（飛田良文〔編集主幹〕、明治書院、2007 年）の「日本大辞書」項目（前田富祺執筆）の説である。

<sup>2</sup> 近年最も『日本大辞書』を国語史資料として評価しているのは、湯浅茂雄である（湯浅 2020、同 2021、同 2022）。また、木村義之（2015）、今野真二（2014）らの研究もある。こうした流れを受け、河瀬真弥（2023）は「あさまし」の用例収集法を通して、国語史資料として『日本大辞書』を用いる場合の信頼性について述べている。また、河瀬真弥（2024）は近世文学における用例収集法を通して、『日本大辞書』を国語史の資料として用いる際の留意点を述べている。ただし、アクセント史の資料としては従来から評価されてきた。例えば稲垣正幸は「明治に入って、東京アクセントについては、すでにその中葉において、先覚者山田美妙氏が『日本大辞書』（明二五）をもって時代を卓絶した業績を残した」と、高い評価を与えている（稲垣 1952: 13）。

ては、考察が及ばないところもある<sup>3</sup>。

本稿で取り上げるのは、『日本大辞書』における音義説である。音義説とは、「日本語の音（音節・拍）の一つ一つが、それぞれ意味をもっていると考えた立場（音義派）に基づいて、すべての語の語源を説明しようとするものである」（『日本語大事典』（佐藤武義、前田富祺〔編集代表〕、朝倉書店、2014年）「音義説」項目〔岡島昭浩執筆〕：上 269）<sup>4</sup>。例えば、「な」「に」「ぬ」「ね」「の」には「滑らかな」という意味がある<sup>5</sup>、といった形で日本語を説明しようとするのが音義説である。音義説は非科学的語源理論であり、「近代言語学では、語形と意味との関係の非必然性（恣意性）が説かれ、その観点からも、音義説は否定されている」（同：上 269）とある。

国語学史研究上、近代における音義説の展開というトピックは無視されていると言えよう。近世における音義説については古田東朔（1972: 310–313）に概説されている一方で、明治以後の国語学の状況を概説する古田東朔、築島裕（1972）では音義説を取り上げない。山東功（2023〔初版 2019〕）も国語学史を素描する中で、近世のトピックとしては「音義言霊派」を取り上げる一方、近代のトピックとしては音義説に触れていない。さらに山東は、音義派と対照的な態度を取る「言語実証派」が「明治以降の西洋近代化の中、黒川真頼や物集高見といった国学者の研究へと受け継がれており、ある意味で、近代的な言語研究の受け皿的な存在であったと言える」（山東 2023: 296）と述べる。音義説ではない流派が受け継がれている、というのが国語学史の流れであるという見方は妥当な見解であろう。

また、音義説は科学的音韻研究の敵、という認識もあるかもしれない。科学的音韻研究史を素描する釘貫亨は「19世紀移後は、後期国学の音義言霊派の跳梁に押されて急速に実証力が衰退した」と述べる（釘貫 2013: 67）。現代の国語学のルーツを訪ねる、ということ国語学史の記述が志向するならば、音義説は無視されて当然とも言える<sup>6</sup>。このように近代における音義説の展開については先学も多くは触れようとしない。

ただし、山東功（2019）は近世末の「言語論」の展開を国語学史と接続しようとする試みとして注目される。とは言え、近世末の「言語論」の内容が近代にいかに関与したか、という問題には深く立ち入らず、近世末の「言語論」がどう国語学史として叙述されたか、

<sup>3</sup> 湯浅茂雄は、「山田美妙は明治 20 年代頃の最新の方言研究の成果を利用した可能性があり」と述べており（湯浅 2022: 左開 85）、『日本大辞書』における山田美妙の学問を考察する貴重な試みと言える。とはいえ、『日本大辞書』に見える山田美妙の学問についての研究はさらに推し進められるべきであろう。

<sup>4</sup> すべての語の語源を説明する原理であるとする点が、オノマトペなどを対象として現在盛んに研究されている「音象徴」とは異なる。『日本語学大辞典』（日本語学会〔編〕、東京堂出版、2018年）の「オノマトペ」の項目（山口仲美執筆）:87 では「オノマトペが一般語と大きく異なっているのは、言語音（＝形態）と意味との間に心理的な必然性があるということである」と解説されている。

<sup>5</sup> この説明は、後にふれる『古史本辞経』の説明を参考にした。

<sup>6</sup> 本稿は近代における音義説の展開をたどる一助となることも目指している。

ということを問題としていることには注意したい。つまり、山東功（2019）も、本稿で扱うような音義説の近代における展開ということを問題とした論ではないように見える。山東自身が「音義説は国語学（言語学）的に見て、いわば放逐可能な状態であった訳である。実際、東京帝国大学や京都帝国大学において、音義言霊論を国語学の問題として扱った研究は存在しない」としている（山東 2019: 縦書 154）。

山東功（2019）で重要視されるのは保科孝一『国語学小史』（1899 年）である。山東は本稿でもこの後触れる時枝誠記までもを射程に入れ、「保科のような国語学史編述の態度は、明治期の国学に対する認識そのものを示している。それは、時枝誠記に至るまでの国語学史のあり方を規定するものでもあった」と述べる（同: 縦書 153）。その、国語学史叙述に重要な役割を果たした保科孝一は、平田篤胤の音義説書『古史本辞経』の解説箇所において、音義説流の考え方を「一向取るに足らぬ説であります」（『国語学小史』: 300〔164 コマ目〕）、「此五十音義解は極端なる音義説でありました、一般に附会の説が多い」（同: 304〔166 コマ目〕）などと酷評する。保科の考えを代表的なものとするのであれば、音義説はアカデミアに受け入れられるものではなかったと言えよう。

また、同じく山田美妙と近い時代では、『日本大辞書』よりは後であるものの 1899 年に大矢透が多少評価をしつつも批判をしている<sup>7</sup>。

第二〈引用者注：音義説のこと。大矢透は「一音義説」を呼んでいる〉は、第一〈引用者注：「延約通略説」という語源理論〉に比すれば、大に進歩せるものにて、其原に逢ふもの、頗る多し。されども、此説に従ふときは、言語の前に、五十音の如き、個々独立して、万語に流用すべき音韻ありて、之を結合して、言語を成せるものとせざるべからず。是、畢竟、事物進化の理、未タ開けず、太古の人は、皆、神聖なりしといふ妄想を基礎とせるものなれば、到底、吾人の服すること能はざる所なり。

（大矢透『国語溯原』（1889 年）: 14〔18 コマ目〕）

これによると、音義説を認めるならば、言語以前に五十音という秩序だったものがあり、それを組み合わせて言語ができたということになる。そのような説は認められないということである。

以上、少し長くなったが音義説の位置づけについて確認した。過去から現在に至るまで無視される、あるいは酷評されているのが音義説と言えよう。このような音義説的記述という非科学的語源理論が見られることをもって、『日本大辞書』は質が悪い、

<sup>7</sup> 『国史大辞典』（「JapanKnowledgeLib」版によった）の「音義説」項目（前田富祺執筆）にも「明治になってヨーロッパの学問が入ってきて否定された」とある。

とすることは簡単である<sup>8</sup>。確かに、“『日本大辞書』は質が高い。音義説的説明を取り入れているからだ”と見なすことはできない。しかし、国語学史、国語辞書史の研究としては、それでは物足りない。音義説が科学的でないから音義説を踏まえる『日本大辞書』は粗悪である、と片付けても『日本大辞書』を理解したことにはならないだろう。現在から見て高水準である面と粗悪な面を併せ呑んだ時にはじめて、『日本大辞書』を国語学史・国語辞書史に定位することが可能になる。音義説が近代においてどのように展開してきたのか、どのような部分が合理的だと共感を得たのか、ということを探る研究は、国語学史・国語辞書史の研究としては、意味のあることだと稿者は考える。マーティン・J・S・ラドウィックが、『化石の意味 古生物学史挿話』を著した時の、現代から見て非科学的な学説もすくい取るような態度が、『日本大辞書』研究に限らず国語学史全体にも求められるのではないだろうか（訳文のみの引用）。

わたしは古生物学史の「登場人物」を英雄と悪役に区別することなど、彼らの時代の文脈に置いてみるなら決して可能ではないことを指摘する価値はあると感じてきた。その意見に応じて彼らに及第点や落第点を割り当てることを全面的に控え、代わりに彼らを彼ら自身の世界観にもとづいて少しでもそれを解こうとした人間として、理解することはむろんもっと実りのある興味深い試みである。

（マーティン・J・S・ラドウィック著、菅谷暁、風間敏訳 2013: 10）

なお、音義説に対する態度として触れなければならないのは時枝誠記（1940）である。時枝は音義説を学史研究の対象とすることの意義について、「例へば音義説の如き、一見無稽の説の様に考へられるものであつても、かゝる説が生み出されるのは、その根底に国語の語詞構造が屢々単音の複合から成立する合成語であることが多いといふ事実が存在する為であることを認め得るのである」と述べる（時枝 1940: 19）<sup>9</sup>。

時枝は「学史のありのまゝの変遷」を見ようとする点において、稿者の見解と共通する。しかし、時枝と稿者では学史観が異なるところもある。時枝は「国語学史は常に新しい様式を以て書き改められることとなつて、国語学の新しい展開に不断の寄与をなすであらうと考へられるのである」とする（同: 21）。先に引用した（同: 19）の説も音義説に国語学上先見の明があるとするものである。一方稿者は、国語学史は国語学に寄与することを目的としなくて良いと考える。国語学史の資料において、現在国語学的無価値のものは確

<sup>8</sup> 音義説的記述という非科学的語源理論が見られることをもって、『日本大辞書』は質が悪い、という議論がいま実際あるわけではない。ただし、そのような議論につながり得る評価が、これまで『日本大辞書』に下されているとは言って良いだろう。

<sup>9</sup> 時枝誠記があえて音義説を評価しようとするのも、それまでアカデミアで音義説が取り上げられてこなかったということを逆説的に物語っていないだろうか。

かにある。しかし国語学史上意味のある事柄だけで国語学史を叙述するならば、国語学史は天才の歴史となってしまう。国語学に業績を残した天才の事績のみで綴られた、純度の高い国語学史は、果たしてその当時の国語学の姿をそのまま写し取っているのか、という疑問が生まれよう<sup>10</sup>。

また、国語学史研究が文化史研究に影響を与えうるものの例として、語源説の例を取り上げたい。土居文人は俳人である松永貞徳の語源辞書『和句解』（1662年刊）の語源説を分析した上で、

『和句解』の語源説が言語遊戯的である理由は、貞徳（あるいは、貞徳と一緒に和語の語源を考えた人たち）の語源を考える営為が、俳諧の延長線上にあったからと考えられる。『和句解』は貞徳の洒落であり、『和句解』から私たちは語源よりも貞徳の洒落を学ぶべきなのであろう。（土居文人〔2015: 266〕）

と述べる。語源説の妥当性そのものを問題にするのではなく、それが貞徳の俳諧を理解するために必要であるというのである。国語学史研究と文化史の関係を考察する上で、参考にすべき見解であろう。

山田美妙の持つ音義説の文化的側面としては、詩作との関係が挙げられる。本稿第3節では、音義説的説明と美妙の音調への関心に親和性があったことについて述べる。山田美妙によると、音調と詩作には密接な関係がある。「音調を主眼とするのが詩歌の性質で、それで無いのが文章の性質です」（『言文一致論概略』1888年、『山田美妙集』第9巻: 8）と山田美妙は述べる。詩の本質は音調であるのだと言う。音義説が音調に関わるものであるならば、山田美妙の詩や詩論と音義説には深い関係がある可能性がある<sup>11</sup>。詩作と言語への関心への関わりがある可能性があるということが、山田美妙の音義説の持ちうる文化的側面の一例である。

本稿は「天才の歴史」ではない国語学史の叙述を目指すこと、音義説の文化的側面の考察の一助とすることが目的であり、その目的の達成には意義があるものと思われるため、音義説の見方が今日の国語学上重要であるかどうかを問わずに音義説の受容を取り上げる。

本稿の概要は以下の通りである。まず『日本大辞書』が平田篤胤流の音義説の影響を受けていることを明らかにする（第2節）。続いて、音義説的説明と美妙の関心は親和性が

<sup>10</sup> 国語学史と国語史の関係のあるべき形については、山東功（2002）に詳しい論があり、「徹底的客観性」を重視する（山東 2002: 89）。

<sup>11</sup> 参考になるものとしては、萩原朔太郎の詩論には音義説のような考えがあるという（安 1993）。ただし、ここでの「音義説」の用語は、朔太郎の詩論に対して安が「徳川時代国学者たちの唱えた「音義説」の語をあてた」ものである（安 1993: 93）。

高かったことを論じる（第3節）。最後に、美妙の音義説的説明は国学と思想的基盤を共有しないことを述べる（第4節）。

## 2 平田篤胤『古史本辞経』流の音義説からの影響

『日本大辞書』の音義説は、一行一義説である。音義説の文献のうち、一行一義の説をとる代表的な文献は平田篤胤の『古史本辞経』（1850年序）であろう<sup>12</sup>。

『日本大辞書』には五十音の各行において、総論と呼ばれる記述が設けられている。比較していくと、『日本大辞書』には「あ」の総論を除く各行の総論<sup>13</sup>において、その行の意味が説かれている<sup>14</sup>。まずは「か」の総論を見てみよう。

### 【① 『日本大辞書』か総論】

か（総論）〈中略〉

（八）か縦行全体ノ音ノ意味ハ窺カニ求メテ多少確カナ手ガカリモ付イタ。帰スルトコロ、さんすくりつとト其大キナ似寄リニ於イテ互ヒニ相近イノモ不思議デアル。

第一、さんすくりつとニ於イテハ疑問ノ義ヲ示ス語ニ日本ト同ジカトイフ語ガ有ル。

第二、其他さんすくりつとノ K（か縦行）ニ最モ多数ヲ占メル語ノ意味ヲ探レバ、何レモ皆、公明、正大、光輝、秀逸、正確、堅固、猛烈、鋭敏、満足、愉快ナドノ義ヲ含ム。即チ、か（Ka）、火、赫、聯合、連続、孔雀、富貴、光明、幸福、喜悦、清水、頭、毛髪ナドノ義。かく（Kakh）、大笑ノ義、かつと（Kat）、蓋、被、表ナドノ義。かしゆ（Kac）、束縛、叫、泣、号、呼ナドノ義。かつど（Kad）、殺害ノ義。かてユ（Katu）、鋭利、深刻ナドノ義。かん（Kan）満足、愛情ナドノ義。

日本デモ例ハ同ジク、さんすくりつとニアルダケノ大体ノ義ヲ含ム語ガ悉クか縦行ノ多数ヲ支配シ、多クハか縦行ノ音ヲ主トシテ持ツ語ハ皆晴レガマシイ義、タシカナ義、明白ナ義ナドヲ持ツ。即チ、名詞デイヘバ、かしら（頭）、かみ（髪）、かみ（神）、かみ（上）、かね（金）、きみ（君）、きず（疵）、くま（熊）、くぢら（鯨）、くも（雲）、け（毛）、け（食）、け（蹴）、こころ（心）ナドノ類。

<sup>12</sup> 『古史本辞経』の概要については（村岡 1957: 187-193）や（山東 2019: 縦書 146-148）に詳しい。

<sup>13</sup> 総論という名称を付さないが、位置づけとして総論と判断されるものも含む。

<sup>14</sup> 『日本大辞書』の「あ」総論に音義説的記述が無いということから、あ行の編纂とか行の編纂の間の時期に音義説に触れた可能性があり得る。『古史本辞経』は「あ」行にも音義があることを認めており、あ行について「<sup>ウル</sup>宇流てふ言の出来しよりぞ。その音義を<sup>ニニナシ</sup>成たりける」（第2冊・19コマ目）のように音義について説明している。

動詞、又ハ形容詞、又、根詞デイヘバ、かたし（堅）、かく（搔）、かつ（勝）、かがやく（赫）、きる（斫）、ころす（殺）、ける（蹴）、かける（馳）、かる（刈）、かむ（嚙）、きざむ（刻）、かぶせる（被）、からし（辛）、くだす（下）、かかる（懸）、からから（笑ふ顔）ナドノ類。スベテ、ムシロ柔性ヨリハ剛性ノ義ヲ含ム。

（『日本大辞書』第4巻: 361）

「か縦行全体ノ音ノ意味ハ窃カニ求メテ多少確カナ手ガカリモ付イタ」とあるように、カ行に固有の意味があるという考えに山田美妙が立つことは明らかである。そして『日本大辞書』は「さんすくりっと」での疑問詞（「第一」）や「K」の音の意味（「第二」）を考えている。そして日本語でも例を挙げ、「スベテ、ムシロ柔性ヨリハ剛性ノ義ヲ含ム」と結んでいる。

「さ」以降の総論についても、以下に挙げておこう。「か」の総論と同様に一行一義説を取っていることが分かる。「ま」の総論については、意味は明示されていないものの、ま行全体で「五音」「五行」として共通した意味を根底に見ていることから、一行一義説と判断して良いと思われる<sup>15</sup>。

#### 【資料② 『日本大辞書』さ～ら総論】

さ （総論）〈中略〉

（六）さ縦行全体ノ音ハスベテ自然ニ空気ガ口中デ烈シイ摩擦ヲ行ツテ出ル所カラオノヅカラ其意味モ亦スベテ摩レ合フ体、摩レ合ツテ其一種ノ音ノ出ル体ナドヲ示シ、か縦行ニ続イテ堅固、勇壮、正確、猛烈、痛激ナドノ意ヲ含ム。即チ さく（裂）、しむ（染）、する（摩）、せがむ、そよぐ（戦）ナドノ類。

（『日本大辞書』第7巻: 753）

た （総論）〈中略〉

（八）た縦行全体ノ音ハスベテ強ク出ル所カラ、オノヅカラ其意味モ亦力強イ方ニ傾クコト、即チ、たつ（断）、ちから（力）、つよし（強）、てる（照）、とづ（閉）ノ類。

（『日本大辞書』第9巻: 988）

な （総論）〈中略〉発音ノ方法、た縦行ト変ハル点ハ唯舌頭デ空気ヲ猛烈ニ弾カズ、ムシロ滑ラカニ弾クトコロバカリ。〈中略〉

<sup>15</sup> 「五行」等に関する記述は「ら」の総論に「五行デハ「火」、五音では「徵」ニ配シタ」（『日本大辞書』第10巻補遺: 1360）のように他の行の総論にも見えるものであり、「ま」総論特有ということではない。

(三) な縦行全体ノ音ハスベテ滑ラカニ出ルコトカラ、其意味モ亦滑ラカナ方ニ傾クコト、即チ、なめらか(滑)、にる(煮)、ぬくし(温)、ね(音)、のぶ(伸)ノ類。 (『日本大辞書』第10巻: 1131)

は(総論) 〈中略〉

(五) 此縦行ノ音ハスベテ軽ク、跳ネテ出ルトコロカラ、オノズカラ又ソノ意味モ活動、軽躁ナドノ義ニ富ム。はゆ(映)、ひる(乾)、ふむ(踏)、へぐ(剥)、ほゆ(吼)ナドノ類。 (『日本大辞書』第10巻: 1180)

ま 五十音、ま縦行第一ノ仮名。此縦行ノ仮名ハば、ぱノ柔モノデ、即チ唇ノ作用デ発スル故、「唇音」トシ、五音デ「羽」、五行デ「水」ニ宛テラレタ。既ニば、ぱナドト同種ノモノユエ、同ジクば、ぱヲ経テば、ぱガ通ズル他ノ音ト相通ズル。 (『日本大辞書』第10巻補遺: 1290)

や 〈中略〉全体ニ特色ハ著シク無シ、素ヨリあ行ニハ通フ、又其発音ノ近イトコロカラ行、又さ行ト通フ。音ノ意味ノ強弱剛柔共ニ有ル。 (『日本大辞書』第10巻補遺: 1339)

ら 〈中略〉意味ハ大抵円滑、粘着ナドノ義ヲ示ス。 (『日本大辞書』第10巻補遺: 1360)

これらの中でも、「か」総論、「な」総論、「は」総論については、平田篤胤『古史本辞経』からの影響が見てとれる。まず、「か」総論を確認しよう。資料①で引用した通り、「か」の総論には、カ行の音の特徴として「ムシロ柔性ヨリハ剛性ノ義ヲ含ム」と述べられていた。以下の『古史本辞経』のか行に関する意味を述べる箇所の記述と比較してみよう。

さて此五声はも。佐行と同じく。牙嚙に<sup>オコ</sup>起れるが。嚙は元より。剛に<sup>カタラカ</sup>堅如<sup>カタラカ</sup>なると。柔に<sup>スルド</sup>夔利<sup>スルド</sup>なると。相兼たる所にて。此行は。其剛に<sup>カタラカ</sup>堅如<sup>カタラカ</sup>なる方より。発<sup>オコ</sup>れる声等なる故に。其音象<sup>ノネイロオノツカラ</sup>自然<sup>ノサマ</sup>に其趣<sup>キコ</sup>に聞<sup>ワカ</sup>えて。右の如く五義に別<sup>ワカ</sup>り軌煌<sup>カキク</sup>旋消<sup>ケヨ</sup>凝<sup>オモデ</sup>その顚<sup>オモデ</sup>に立ち、旋<sup>クル</sup>その幽<sup>ウラ</sup>を主<sup>シ</sup>りて言<sup>コト</sup>霊<sup>タマ</sup>の幸<sup>サチ</sup>を為<sup>ナス</sup>こと、上<sup>ノ</sup>件の譜<sup>ミ</sup>字<sup>ミ</sup>視<sup>ミ</sup>て知<sup>ミ</sup>べし。

(『古史本辞経』第2冊: 38ウ〔42コマ目〕)

『日本大辞書』にある「剛性ノ義」は『古史本辞経』で「此行は、其剛に<sup>カタラカ</sup>堅如<sup>カタラカ</sup>なる方よ

り。発<sup>オコ</sup>れる声等なるに。其音象<sup>ノネイロオノツカラ</sup>自然に其趣<sup>ノサマ</sup>に聞えて」とされているのに通じる。

続いて、「な」総論を確認しよう。【資料②】で挙げた「な」の総論には「な縦行全体ノ音ハスベテ滑<sup>スメラカ</sup>ラカニ出ルコトカラ、其意味モ亦滑<sup>スメラカ</sup>ラカナ方ニ傾クコト、」とあった。『古史本辞経』の、な行の意味を述べる箇所と比べてみよう。

さて此五声はも。多行と同じく。舌上<sup>オコ</sup>に起れるが。舌は元より。剛に光澤<sup>ツヤンカ</sup>なると。柔<sup>ニ</sup>に滑潤<sup>スメラカ</sup>なると。相兼<sup>ニ</sup>たる所にて。此行は其柔<sup>スメラカ</sup>に滑潤<sup>スメラカ</sup>なる方より発<sup>オコ</sup>れるに。鼻音<sup>ノト</sup>の添<sup>ニ</sup>たる声等なれば。其音象<sup>ノネイロ</sup>自然に。其趣<sup>ノサマ</sup>に聞えて、〈以下略〉

（『古史本辞経』第2冊: 58 オ〔61 コマ目〕）

『日本大辞書』の記述は、『古史本辞経』が「此行は其柔<sup>スメラカ</sup>に滑潤<sup>スメラカ</sup>なる方より発<sup>オコ</sup>れるに。鼻音<sup>ノト</sup>の添<sup>ニ</sup>たる声等なれば。其音象<sup>ノネイロ</sup>自然に。其趣<sup>ノサマ</sup>に聞えて」とする説明に通じる。「滑<sup>スメラカ</sup>ラカ」と「滑潤<sup>スメラカ</sup>」は表現レベルでかなり似通っている。また『日本大辞書』と『古史本辞経』ともに、た行との発音の類似点を記述している。

さらに続けて、「は」総論を確認しよう。【資料②】で挙げた「は」の総論には「此縦行ノ音ハスベテ軽ク、跳ネテ出ルトコロカラ、オノズカラ又ソノ意味モ活動、輕躁ナドノ義ニ富ム」とあった。これも『古史本辞経』の、は行の意味を述べる箇所と比べてみよう。

さて此五声はも。麻行と同じく。脣<sup>クチビル</sup>に起れるが。脣の元より輕<sup>カログフ</sup>含める所なるに。波行は其内<sup>ウチベ</sup>に。柔<sup>ニ</sup>に触れて出る声等なる故に。其音象<sup>ノネイロ</sup>自然に其趣<sup>ノサマ</sup>に聞えて。右の如く五義<sup>ワカ</sup>に別り。

（『古史本辞経』第3冊・6 ウ〔9 コマ目〕）

「は」については二者ともに「輕躁」（『日本大辞書』）、「輕<sup>カログフ</sup>含める」（『古史本辞経』）をその意味として考えている。

ここまで、『日本大辞書』における『古史本辞経』流の音義説からの影響を確認した。

課題としては、『古史本辞経』からの直接の影響があったのか、それとも『古史本辞経』流の他の音義説関係の書からの影響により『日本大辞書』が音義説を取り入れたのか、ということの検討を要することである。ただし、表現レベルでの類似点もいくらか見られることから、『古史本辞経』からの直接的影響があった可能性は低くないように思われる（他の音義説書からの影響であったとしても、その音義説書は『古史本辞経』の考えを濃厚に受け継ぐものであろう）。また、美妙が『古史本辞経』をどのような形で手にしていたのか（使用した版、利用していた図書館は何か、あるいは入手していたか）ということも検討を要する。

### 3 音義説と美妙の関心との親和性

『日本大辞書』は音義説的説明を行っており、音義説的説明を行う以上は音義説に何らかの価値を山田美妙は見いだしていた、と考えられる。では、美妙が音義説を取り入れた理由は何かということを考えよう。その理由は音義説が各行の音の意味の法則を見だし、説明しようとしている点に、音調法則を重視した美妙自身の考えとの共通点を感じたからである、と稿者は考えている<sup>16</sup>。山田美妙が世界の言語に見られる法則の探求に関心があったことについては、大橋崇行（2017〔初出 2013〕）に指摘がある。まず、同（2017）の指摘する例から確認していこう。

〈前略〉日本デハ古事記、万葉ノ昔カラ之ヲ「な」（名）トイヒ、英デハ之ヲ「ねえむ」（Name）トイヒ、さんすくりつとデハ之ヲ「にやまん」トイヒ、拉丁デハ之ヲ「のおめん」トイフヤウナ、イヅレモ是ダケハ N ノ音ヲ大方出スノモ或ヒハ又何カノ点ニ於テ相一致関係スル所ハ有ルカモ知レヌ。ヨシサウデ無イ処ガ、兎モ角モ此命名法ハ何レノ国、何レノ人民ヲ問ハズコトゴトク皆一樣ノ法則ノ下ニ在ツテ行ハレル処デ、サテサウシテ出来タ、所謂「名」トイフモノハ實際ドウイフ性質ノ物カ？

スデニ其本来ガソレゾレノ固有ノ点デ出来ルダケ取ツテ「名」トハスル。ガ、其固有ノ点ツツバカリデハマダ「名」ノミニハ必ズ限ラヌ。動詞、形容詞ナドノ他ノ語デモ固有ノ点ハ何レモ取ル。

（『日本大辞書』「緒言 日本辞書編纂法私見」：12-13）

これを踏まえて同（2017）は以下のように述べる。

ここには、美妙が持っていた翻訳、さらには言語そのものに対する重要な問題意識が示されている。

美妙によれば、名詞によって表される概念を翻訳するというのは、たとえば英語のような特定の言語における名詞が、日本語でいうとどの名詞に当たるかといった二つの言語間における概念の対照によって行われるものではない。サンスクリット語やラテン語なども含め、名詞によって表象される対象は、「皆一樣ノ法則ノ下」で「固有ノ点」に焦点化することによって概念化されるものであり、このような概念の言語による表出は、名詞に限らず、動詞や形容詞などでも可能だという。

（大橋崇行 2017: 191）

<sup>16</sup> 元々美妙の考えの中に音義説的なものがあったことについては否定しきれないが、あ総論に音義説的記述は見られない。そのため（音義説以外の）音調法則への関心というベースがあった上で、音義説の考えに共感し、取り入れたという流れを想定している。

このように同(2017)は、美妙が翻訳をいかに考えていたか、という論の中で、言語の法則が重んじられたことを指摘している。

美妙による、言語についての法則への関心は翻訳に限ったことではない。本稿で論じている音義説的説明との関係で法則化に目を向けると、美妙が抱いていた法則については、音韻や音調に関わるものが度々であることに注目される<sup>17</sup>。また、美妙が見いだした、アクセントに関するものを中心とした音韻の法則そのものについては三宅武郎(1969)に既に詳しい。本稿では、見いだされた法則そのものではなく、法則を見いだそうとする美妙の態度や関心を中心に、『日本大辞書』の記述を再確認していきたい。

まず、先に大橋崇行(2017)が触れた箇所においても、「名」を表す単語についてさまざまな言語で「N」から始まることに言及していた。

他にも、『日本大辞書』には世界の言語の音調に関して共通点を見いだそうとしている箇所がある。

△おも(第一上)名{(阿母)} 古言。母ト同ジ語。

◎世界ノ言語ニアル普通ノ特質トシテ世界各国何レニモま、み、む、め、もノ五音ノ中ヲ以テハハトイフ義ヲ現スノが極メテ多数デ、之ニ洩レル例外ハマコトニ少ナイ。コトニありやん人種ニ至ツテハ井然トヨク一致シ、さんすくりつとデモ、ぐりいくデモ、らてんデモ、じやあまんデモ、すらぼにつくデモ、けるちつくデモ何レモ皆同ジ体ヲナスコト、即チ、さんすくりつとデマあた、らてんデマあてる、古代ノはんがりやデむおたる、今ノ英デ、まざる、今ノ日耳曼デむつてるトイフヤウナ類。更ニ転ジテ、東洋ノ各種族ニ至ツテモ同ジク不思議ニ此自然ノ発音ノ束縛ヲバ、免レル事ガ為ラズ、即チ、支那デハ「母(音、むう)」、琉球デハあんまあ、朝鮮デハをゆみトイフヤウナ類、正ニ此日本ノ古言ノおもモーヨシ今ハ廢語トナツタニシロー此世界ノ自然ニ伴フ例ノ一ツトシテ見做サレル。畢竟、ソレニモイハレガ有リ、ま縦行ノ発音ハマノ部デ解クトホリ、スベテ輕ク唇ヲ取り合ハセテヤガテ発スル音デ、其音ハ最モ子供ノ能ク熟練シ得ラレルモノ、ははト云ヤウナ身ニ接近シテキルモノノ名ハ第一必ズ最モ言ヒヤスイ音調ニ因ツテ云フノハ自然ノ道理デ、万国ノ一致スルノモ当然デアル。

(『日本大辞書』第3巻: 344)

「おも」条では「世界ノ言語ニアル普通ノ特質」としてマ行音で「母」の意味を表すことを説き、各種の言語での例を説明している。そして「ははト云ヤウナ身ニ接近シテキル

<sup>17</sup> 『日本大辞書』には全ての見出し語にアクセントが示されているという特徴がある。これは『日本大辞書』最大の特徴としてよく知られるところである。

モノノ名ハ第一必ズ最モ言ヒヤスイ音調ニ因ツテ云フノハ自然ノ道理デ」あるとする。「音調」に関わる共通性を見いだしている。

また、各言語内部の音調法則について、『日本大辞書』巻末の「日本音調論」にて触れられている。

今日世界ニ数多ノ言語ノ種類ガ有ツテ從ツテ其音調モ種種有ルモノノ、歸スル処音調ハ上ト平トノ配合ノ外ハ無イ。言語ノ分類ハ兎モ角モ泰西ノ言語学者ガ既ニ定メタコトユエ今言ハズ、唯音調ニツイテ言ヘバ、是程ニ錯綜シタラシイ音調ガ上、平ノ二種グラキ又極ハメテ単純ニ歸スルノモ奇極ハマル。事奇ナノハ是ノミデナシ、世界各国ノ音調ノ風ガ其国ニヨツテ各違フ、其違フノガ扱無法デナク、多クハ一律ヲ履ムノモ妙極ハマル。英語ハ英語ノ音調ガ有リ、一言語ノ最初カ中程ガ多ク昂ガル、又仏語ハ之ニ反シ、多クハ其末ガ昂ガル、斯ウシテ互ヒニ其特色ヲ成ス処デ、何故ニ此特色ガ有ルカ、何ノ法則カガ有ツテ之ヲ貫キ得ルカ、其結果ノ有ル以上ハ其原因ノ有ルノハ言フマデモナイ。ナラバ此特色ニ其原因ガ有ルカ？何レ有ルニハ違ヒナイ。

（『日本大辞書』附録「日本音調論」：45）<sup>18</sup>

世界各国の言語の「音調」について、各々の言語に違いはあるものの、各言語においては「多クハ一律ヲ履ム」としている。また、「何ノ法則カガ有ツテ之ヲ貫キ得ルカ、其結果ノ有ル以上ハ其原因ノ有ルノハ言フマデモナイ」と、各言語の「音調」に法則があることを述べている。

そして「日本音調論」では日本語にも音調に法則があるとする。

果タシテ吾人ノ研究ノ眼目タル日本語ノ音調ニ一定ノ律ガ有ルカト言ヘバ明キラカニ其結果カラ見テ確カニ有ル。（『日本大辞書』附録「日本音調論」：46）

音調・音韻を重視して周辺の現象を論じる試みとしては、「おどかす」条が注目される。

おどかす（…〈引用者注：ここでは「全平」を表す。つまり上昇調の箇所なし〉）

他動、一。{…す} オドス。＝ビックリサセル。＝脅迫スル。

◎言海ニ是等おどかし、おどかすヲ説イテおどろかすカラ来タ語トシタノハ心得ナイ。何サマサウト云ツテモ善シ、但シかすハ今日ノ普通語ニ最モ多ク現ハレル語デ、ねぢるヲねぢくるトシ、ころばすヲころばかすトスルノト道理ハ違ハヌ。殊

<sup>18</sup> 「音調ニツイテ言ヘバ、是程ニ錯綜シタラシイ音調ガ上、平ノ二種グラキ又極ハメテ単純ニ歸スルノモ奇極ハマル」という部分については三宅武郎（1969: 11）が触れている。

ニマタおどろかすカラ来タモノナラバ、日本語ノ音調ノ規則トシテ、おどろかすハ第四上、其全五言ノ第四上ガ直グニ四言ノモノニナツテ、其前ノ上声ガ付イタ音ガ無クナラズニキル所デ、若シサウ短クナレバ、ムシロ第二上、即チおどかす（第二上）トナラナケレバナラヌ。但シ此語ニ限ツテ全平デアル。

（『日本大辞書』第3巻: 314-315）

「おどかす」の語構成は音調法則に適合しないことから、「ねぢくる」や「ころばかす」とは語構成が異なると述べている。語構成の決定に際して、アクセント規則への適合・不適合を重要な条件に位置づけていることが分かる。

なお、以下に見るように美妙は『日本大辞書』以後にも、音調・音韻に関する法則への関心を持ち続けている。

すべて転語は母語たる原語の音調を受け伝へる。これは人類の殆んどすべての言語世界に殆んど定理として存在する。

（山田美妙〔評釈〕『博多小女郎波枕』〔1902年〕：67〔43コマ目〕）

以上見たように、音調・音韻に関する法則の探求に山田美妙は相当の熱意を見せていた。音義説も語源に関する音調・音韻の法則を見いだそうとする理論である。美妙の関心と音義説は親和性があると言えないだろうか<sup>19</sup>。

#### 4 美妙音義説と国学流音義説の思想的基盤の差異

最後に、山田美妙による音義説受容の背景を探っていきたい。

まず、音義説は神秘的な国粹主義が色濃い学説である。山東功は音義説を主張する一派について「国家意識の高まりを見せる中で過激さを増し、大きな力をもつようになってい

<sup>19</sup> 以上は美妙の内部での関心という面から、音義説の受容の背景を述べた。一方、音義説の当時の評価という面からも受容の背景を考える必要がある。本稿では深くは立ち入れないが、第1節にて引用した大矢透の著作『国語溯原』が、音義説を「延約通畧」説に比して「大に進歩せるもの」と評しているように、多少の独創性が認められていたことも無視はできないだろう。『国語溯原』：2（6コマ目）に上田万年が寄せた序文には「篤胤守部残夢元盛等が種々に解釈を試みたる一音一義説〈中略〉それぞれ一種異様の光彩を、語学史上に放てるものにあらざるや」という、音義言霊派について評価する一節がある。山東功（2019）もこの部分を引用し、音義言霊派に「高い評価が与えられており」と述べている（山東 2019: 144）。ただし、『国語溯原』では音義説の根本的な欠陥が指摘されており、単純な高評価というよりは、功罪相半ばする、といった評価だったとみておくべきだろう。同 2011: 14 は、当時の音義説の評価の仕方は「ある意味で異種（他領域）に対する扱いとも似ている」と述べる。

った」と解説する（山東 2023〔初版 2019〕：296）。『古史本辞経』の内容を確認すると、例えば『古史本辞経』の「経」の意味を説明する際、「此はしめ。畏天照大御神の。高天原にして。始めて織ませる御機の事より起れる語なるを〈以下略〉」（第1冊：13コマ目）と日本神話に由来することを述べている。美妙と近い時代においても、既に引用したが大矢透『国語溯原』：14（18コマ目）が音義説の思想基盤を「太古の人は、皆、神聖なりしといふ妄想を基礎とせるものなれば、到底、吾人の服すること能はざる所なり」としている。

しかし、『日本大辞書』を見る限りでは、そのような神秘的な国粹主義への共感から音義説を受容したとは思われない。五十音に関する記述を手がかりに、山田美妙の音義説の説明が神秘的な国粹主義を背景としていないことを確認しよう。

『古史本辞経』は五十音について、次のように述べる。

此五十音と云へる物は。天地の<sup>オノツカラ</sup>自然の道理にて。物の声みな是に洩るゝ事なし。然れば何れの国の詞にても。延べも<sup>ツヅ</sup>約めもしつべき物なるべし。此は<sup>カ</sup>我国にて出来し物ならねど。此をもて吾国の詞をも。能く<sup>ル</sup>釈き知べきなり。

（『古史本辞経』第4冊：30ウ〔33コマ目〕）

五十音は「天地の<sup>オノツカラ</sup>自然の道理」であるから、表せない音は無いと述べられている<sup>20</sup>。

一方、美妙にとって、五十音はそのようなものではない。美妙の『万国人名辞書』上巻（1893年）には次のようにある。

（一）ひとり日本をのみ責めるては無いものの、猶歐洲各国などと比べて日本の仮名ほど不完全なものは無し、もろもろの音、従来普通用の仮名によつて書きあらはさうと思へば十が一も目的を達するに足らず、かと言つて羅馬字とて五十歩が百歩ぐらゐでやはり充分な所までには立到れず〈以下略〉

（『万国人名辞書』上巻「緒言」〔『山田美妙集』第9巻：193-194〕）

「日本の仮名ほど不完全なものは無し」としており、篤胤が五十音を神秘的な存在として尊重する態度とは全く異なる（ただしローマ字も不十分とする）。

また、塩田良平（1938：21-24）は、大学受験に際して美妙が読書した本についての記録を翻字している（仮に「美妙読書記録」と名付ける）。学問分野に目を向けると、「和文学」「漢文学」のようなものがある一方で、「英語学」「独逸語学」「仏語学」が挙げ

<sup>20</sup> 古田東朔も『古史本辞経』を「国語は皇神以来語り継いできたものであるから、万国に優れているものであるとして、古語について音義的解釈を施しているものである」と解説する（山東 1972a：310）。

る。また、「支那哲学」が挙がる一方、「西洋哲学」も挙がる。『日本大辞書』の「ぶんがく」条には「最モ宇宙ノ真、善美ト考ヘラレル処ヲ發揮スル学」（第10巻補遺:1270）とある。「眞、善美」は明らかに西洋哲学の影響であろう<sup>21</sup>。塩田良平は「読書が何処まで徹底してゐたかは疑問」としているが（塩田 1938: 24）、「徹底」されていなくとも、リストに挙がる学問分野や図書への関心があった、ということは言えるだろう。大学受験のためとはいえ、大学といういわば西洋的科学観に根ざした学問の場に参入しようという態度のもとでの読書であるため、やはり西洋の学問への関心は強かったと思われる。

西洋の学問に触れた美妙は音義説から神秘的な国粹主義を脱色した<sup>22</sup>。一方で音義説の核心は維持していた。音義説の受容のされ方として注目に値しよう。

さて、神秘的な国粹主義が脱色されている一方で、西洋に染まりきらない学問のあり方として、五十音に対する態度をもう少しだけ見ておきたい。先ほど引用した『万国人名辞書』上巻「緒言」には次のようにもある。

畢竟最も進歩した文字は最も一定の律で推し得られるものに限る、此点から言へば日本の五十音などは其分類如何にもよく井然として学理に適当し、今までは放任されて居た多少の短所も修正を加へては見事になる事であらうと思つた、是が即ち此度の趣向の初めの考へであつた。

（『万国人名辞書』上巻「緒言」〔『山田美妙集』第9巻:194〕）

同一の文章で、今度は日本の五十音を評価している。ただし、その評価すべき点はあるまでも「学理」に適うからであって、篤胤の言う「天地の<sup>オノツカラ</sup>自然の道理」であるからではない。あくまでも言語学を多少は学んだ美妙は、西洋由来でないものであっても、自身の学説に合うものは評価した。音義説を採用したのも、神秘的な国粹主義への共感ではなく、自身の学説に合うものが偶然、神秘的な国粹主義を背景とする説であった、というだけで

<sup>21</sup> 『日本大百科全書』（「JapanKnowledgeLib」の2024年10月10日版によった）の「真善美」項目（加藤信朗執筆）には「日本へのこの語の移入は、おそらく新カント学派の影響によるものと考えられる」とある。

<sup>22</sup> 神秘的国粹主義的側面の脱色が美妙自身によるものなのか、あるいは別の何者によるものなのかは現時点では判断の材料を持たない。しかし、大矢透が「太古の人は、皆、神聖なりしといふ妄想を基礎とせるもの」（『国語溯原』〔1899年〕:14〔18コマ目〕）と述べるように、音義説が神秘的国粹主義的側面を持つというのが一般的理解である。そのため、美妙自身が一般的な音義説から神秘的国粹主義を脱色したと一旦仮定した上で、その仮定が正しい場合に、国語学史上どのようなことが言えるか、ということに考えを進める。ここでの仮定は、美妙が洋の東西を問わずに様々な学問に触れていること（「美妙読書記録」）を念頭に置くと、一定の妥当性があると考えられる。一方、仮に美妙以外の手で神秘的な国粹主義が脱色された音義説を受容したとしても、一般的でないマニアックな説を美妙が探し求めて、取り入れている点で注目される。

あろう。

このような、神秘的な国粋主義的背景を持たないという点は、次に挙げるように、美妙が『日本大辞書』を著して挑戦的な態度を示した大槻文彦（『言海』の著者）の考え方とむしろ近いようにも思われる。

○国語家は、ともすれば、我が国は言霊のさきはふ国なり、余国の言語は皆欠舌なり、などいふ、己が国の美をことあげせむの心、悪しとにはあらねど、他国の言語を究めもせず、比べもせずして、井蛙固陋の見もて、ひたふるに自尊のみするは、心なし。

（大槻文彦『広日本文典別記』〔1897年〕序論：10〔13コマ目〕）

ここまで、美妙の音義説の特徴を述べた。注意したい点としては、ここで論じた「国粋主義」は、言霊を思想的基盤とする、神秘的な国粋主義と限定すべきであるということが挙げられる。美妙は『日本大辞書』附録の「日本音調論」にて次のように述べている。

是等ハ極端ナ事実ナガラ兎ニ角世界ノ未開国ニ複雑ナ音調ノ行ハレル証左ニハ為ル。ガ、何ノ律ガ有ツテ其様ニ変化スルカハ逆モ研究ノ至ル所デナク、又是ダケノ事実ハ有ツタニシロ直チニ是カラ音ト音トノ結合シタ後チノ音調ノ法則ヲ研究スル材料ニモ為ラヌ。

果タシテ吾人ノ研究ノ眼目タル日本語ノ音調ニ一定ノ律ガ有ルカト言ヘバ明キラカニ其結果カラ見テ確カニアル。〈以下略〉（「日本音調論」：46）

この記述によると、「未開国」にも複雑な音調もあるが、それは法則を研究する材料にはならないという。これは「高等動物若クハ高等社会ノ言語其数ガ多クナレバ為ルホド子音ノ数ガ増ス」（同：46）などというような、社会の発達に伴って子音の数が増えるという考えを前提としている。一方で日本語は音調法則があるという。法則を研究する材料になるかならないかと言えば材料になるのが日本語である、というのが美妙の考えであろう。日本を「高等社会」に位置づける、という美妙の考え自体は読み取れるのである。神秘性の排除が認められる中で文明国への志向が見られる点は注意すべきである。ただし、美妙による文明国への志向については、近代国家を目指した明治時代の潮流の中で美妙に独特であったか、ということも踏まえるべきであろう。むしろ文明国を志向したからこそ、近代科学として認め得ない神秘性を排除したとは考えられないだろうか。

## 5 おわりに

本稿では、『日本大辞書』には音義説的説明が見られ、その音義説的説明は『古史本辞経』からの影響である可能性を指摘した。また、美妙自身が音調・音韻の法則に関心があったため、美妙の音調・音韻重視の態度と、語源に関する音調・音韻の法則というべき音義説は親和性があったことを指摘した。さらに、美妙の音義説の特徴として、従来の音義説が持つ神秘的国粹主義を背景としないことを指摘した。

美妙が現在支持されない説である音義説を採用していることをもって、彼の辞書『日本大辞書』の学問的水準が低いと見なすことはたやすい。しかし、主流ではない理論を美妙なりに自身の関心に合わせて採用していること、その理論の思想的背景を脱色した形で受容した（あるいは、既に何者かによって脱色された音義説をあえて選んで取り入れた）ことは、明治期の学問のあり方として注目できるのではないだろうか。

また、山東功は「近世国学と明治期を繋ぐ時期の研究については、未だ十分に解明されていない実態が存在すると言えるのである」と延べ、「明治期国学者がいかに関西移入の言語学と対峙してきたのかについても検討を行う必要がある」と、国語学史研究の課題を述べている（山東 2011: 18-19）。山田美妙は国学者ではないが、同（2011）が述べる国語学史研究の課題についても、本稿は一定の貢献を果たし得るのではないだろうか。つまり、神秘的国粹主義的側面が脱色された音義説が存することは、その脱色が美妙によるものであっても、何者かによるものであっても「明治期国学者がいかに関西移入の言語学と対峙してきたのか」（同 2011: 19）という課題への手がかりの一つとなりうるのではないだろうか<sup>23</sup>。

〔テキスト〕

・点線および波線は私に付したものである。変体仮名、合字は改める。くの子点も開いた。『日本大辞書』の四点リーダーは、三点リーダーに改めた。今日不適當である表現も、歴史資料としてそのままの表現とした。国立国会図書館蔵本については「国立国会図書館デジタルコレクション」より引用した。併せて「次世代デジタルライブラリー」を検索等に用いたものもある。引用箇所の指示に関して、各デジタルアーカイブ上のコマ数で行うことがある。

<sup>23</sup> 山東功（2011）は明治時代の高等教育機関における、音義説を含む国学の展開を捉える。しかし、山田美妙については考察の対象外であり、国学の展開をより広く捉えることに本稿は寄与できるものと思われる。また、国学の展開を把握する上では国学のテキストの解釈も充分に行うべきである。本稿では平田篤胤の音義説の解釈には踏み込めていないところが多く、今後の課題としなければならない。国学のテキストの解釈如何によっては、本稿で示したものとは別の経路で音義説が流入している可能性も生じうる。しかし、音義説関係の書で第一に知られる『古史本辞経』からの直接ないし間接の影響を指摘した本稿は、今後の本方面での研究を展開させる上で起点になるものであろう。

- ・『広日本文典別記』（大槻文彦著）は国立国会図書館蔵、請求記号（815-O932k-(s)）の本によった。
- ・『国語学小史』（保科孝一著）は国立国会図書館蔵、請求記号（810.12-H692k2）の本によった。
- ・『国語溯源』（大矢透著）は国立国会図書館蔵、請求記号（810.1-O952k）の本によった。
- ・『古史本辞経』は国立公文書館内閣文庫蔵、請求記号（207-0335）の本によった（「国立公文書館デジタルアーカイブ」を使用 <<https://www.digital.archives.go.jp/file/1237543>>）。調査・読解には平田篤胤全集刊行会（編）『新修平田篤胤全集』（名著出版、1977年）を用いた。
- ・『日本大辞書』は明治期国語辞書大系（大空社、1998年）により、検索は「Japanese pre-modern dictionaries 日本近代辞書・字書集」<<https://joao-roiz.jp/JPDICT/>>（豊島正之作成、現在利用不可）および「国立国会図書館デジタルコレクション」（請求記号（813.1-Y157n））「次世代デジタルライブラリー」を用いた（詳細検索の「タイトル」に「日本大辞書」と入力）。「緒言 日本 辞書編纂法私見」および「日本音調論」については『山田美妙集』第9巻（臨川書店、2014年）も確認した（当該資料は青木稔弥、太田路枝校訂）。
- ・『博多小女郎波枕』（山田美妙〔評釈〕〔1902年〕）は国立国会図書館蔵、請求記号（96-100）の本によった。
- ・『万国人名辞書』上巻「緒言」は『山田美妙集』第9巻（臨川書店、2014年）によった（当該資料は青木稔弥、太田路枝校訂）。年代の情報も同解題に従った。
- ・「美妙読書記録」は所蔵情報等が不明であるため、塩田良平 1938: 21-24 が論中に全文翻字するものによった。

#### 《参考文献》

- 大橋崇行 2017（初出 2013）「美妙の〈翻訳〉——「骨は独逸肉は美妙／花の茨、茨の花」大橋崇行『言語と思想の言説（ディスクール）近代文学成立期における山田美妙とその周辺』笠間書院、第2章第2節。初出は『文学・語学』206。
- 河瀬真弥 2023「『日本大辞書』における用例収集法の研究 序説——中古文学における「あさまし」を例に——」『京都大学国文学論叢』49。
- 2024「『日本大辞書』の近世文学用例より考察する山田美妙の辞書編纂法」『訓点語と訓点資料』153。
- 木村義之 2015「山田美妙『日本大辞書』の外来語——国語辞書から見た外来語——」『悠久』143。
- 釘貫亨 2013「明治以降の音韻学」釘貫亨『「国語学」の形成と水脈』ひつじ書房、第5章。
- 今野真二 2014「『言海』をライバル視した山田美妙『日本大辞書』」今野真二『「言海」を読む ことばの海と明治の日本語』角川選書、KADOKAWA、第5章。
- 山東功 2002「日本語学史の定立と本論の構成」山東功『明治前期日本文典の研究』和泉書院、「序」の第四章。
- 2011「明治期国学と国語学」釘貫亨、宮地朝子（編）『名古屋大学グローバル COE プログラム

- ことばに向かう日本の学知』ひつじ書房。
- 2019「幕末国言言語論と国語学」『立命館文学』660。
- 2023（初版 2019）「日本語学史」衣畑智秀（編）『基礎日本語学』第 2 版、第 12 章。
- 塩田良平 1938「活躍時代」塩田良平『山田美妙研究』人文書院、上篇「伝記篇」第 2 章（日本図書センター、1989 年の復刊による）。
- 土居文人 2015「研究編」土居文人『語源辞書松永貞徳『和句解』本文と研究』和泉書院。
- 時枝誠記 1940「序説」時枝誠記『国語学史』岩波書店、第一部。
- 古田東朔、築島裕 1972「明治以後の国語学」古田東朔、築島裕『国語学史』東京大学出版会、第 3 章。
- 古田東朔 1972「近世」古田東朔、築島裕『国語学史』東京大学出版会、第 3 章。
- マーティン・J・S・ラドウィック著、菅谷暁、風間敏訳 2013『化石の意味 古生物学史挿話』みすず書房。
- 三宅武郎 1969「山田美妙のアクセント観」安田喜代門（代表）『国語講座』1、白帝社。
- 村岡典嗣 1957「後期に於ける宣長学と篤胤学」村岡典嗣『宣長と篤胤 日本思想史研究第 3 巻』創文社、第 2 章。
- 安智史 1993「萩原朔太郎・「リズム」から「調べ」へ」『立教大学日本文学』70。
- 山田忠雄 1981「言海以後」山田忠雄『近代国語辞書の歩み その模倣と創意と』上、三省堂、第 3 部第 2 章。
- 湯浅茂雄 2020「『言海』と『日本大辞書』の語彙」飛田良文、佐藤武義（編）『近代の語彙 1 ——四民平等の時代——』シリーズ〈日本語の語彙〉5、朝倉書店。
- 2021「『言海』『日本大辞書』の収録語数をめぐって」『実践国文学』100。
- 2022「山田美妙『日本大辞書』の方言語彙」『実践国文学』101。

『国史大辞典』は「JapanKnowledgeLib」版によった。

『日本語学研究事典』（飛田良文〔編集主幹〕、明治書院、2007 年）。

『日本語学大辞典』（日本語学会〔編〕、東京堂出版、2018 年）。

『日本語大事典』（佐藤武義、前田富祺〔編集代表〕、朝倉書店、2014 年）。

『日本大百科全書』は「JapanKnowledgeLib」の 2024 年 10 月 10 日版によった。

#### 〔付記〕

- ・本研究は JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の助成を受けたものである（稿者への助成期間は 2021 年 10 月～2024 年 3 月）。
- ・本研究は洋学史学会若手部会 4 月例会（2024 年 4 月 6 日 於、電気通信大学）での口頭発表に基づく。ご助言くださった皆様に感謝申し上げます。

---

河瀬 真弥(かわせ・しんや)

2024 年 3 月京都大学大学院文学研究科博士後期課程（国語学国文学専修）研究指導認定退学。京都大学大学院文学研究科アカデミックフェローを経て、2025 年 4 月より京都先端科学大学人文学部講師。現在、明治時代の国語辞書である『言海』と『日本大辞書』を国語学史的に分析する博士論文を準備中。